

## 反ユダヤ主義に関するナンシーの批判的考察について

ハイデガー「黒ノート」への応答

小田 麟太郎(京都大学)

現代フランスの学者ジャン=リュック・ナンシーの思索がハイデガー哲学に対する批判的な応答を通じて展開されているということは広く知られている。『複数にして単数の存在』(1992)ではハイデガーの思索をその全道程にわたって「作り直す」ことの必要性が説かれ、近年の著作『ハイデガーの凡庸さ』(2015)においてもハイデガー「黒ノート」への応答が試みられるなど、ナンシー哲学においてハイデガーに対する批判は一貫して重要な位置を占めている。しかし、こうした重要性にもかかわらず、ナンシーによるハイデガー批判の内実に関してはこれまで十分な検討が行われてこなかった。本発表では、2014年に出版されたハイデガーの「黒ノート」に対するナンシーの応答である『ハイデガーの凡庸さ』(2015)、及びそこで明らかにされる「キリスト教の自己憎悪としての反ユダヤ主義」というモチーフを引き継いだ議論『私たちの中のユダヤ人を排除する』(2018)という二つの著作を中心的に読解することで、「黒ノート」執筆当時(1930年~40年頃)のハイデガーの思索(存在史的思索)に対するナンシーの批判点、そして2000年代以降ナンシー哲学において主要なテーマとなる「キリスト教の脱構築」がそうした批判において果たす意義の一端を明らかにすることを試みる。「黒ノート」はその出版以来、ハイデガーと反ユダヤ主義という問題を巡る多くの論争を引き起こした著作である。そして、ナンシーはハイデガー哲学に対する批判的な議論を展開した多くの現代フランス学者の中でも、2014年に出版された「黒ノート」に応答したという点において非常に希少な存在である。しかし、ナンシーの「黒ノート」論を検討する研究は未だ見られない。本発表は、ナンシー哲学に対する理解もさることながら、「黒ノート」読解への寄与、そしてハイデガーの思索を巡って批判的な議論が多く展開された現代フランス哲学においてナンシーの議論が有する独自性を明らかにせんと試みるものである。

先ずは、『ハイデガーの凡庸さ』の検討を通じて、「黒ノート」批判において「キリスト教の自己憎悪としての反ユダヤ主義」というモチーフの検討が不可欠となる理由を明らかにする。ナンシーはペーター・トラヴニーの「歴史的反ユダヤ主義」という「黒ノート」解釈に同意しつつ、ハイデガーがナチスのような人種的反ユダヤ主義に加担したのではなく、あくまで自身の存在史的思索のモチーフとして反ユダヤ主義的な主張を行ったのだということを主張する。しかし同時に、そうであるが故に、ハイデガーの議論は人種主義よりも更に根深く西洋の歴史全体に取りついている反ユダヤ主義を伴っているのだという点を強調する。こうした評価に基づいて、ナンシーはハイデガーの議論において如何に「ユダヤ」というモチーフが導入されるのかを検討する。そして、ナンシーはハイデガーが西洋の没落の立役者として「ユダヤ」というモチーフを必要としたということ、しかしながらハイデガーは反ユダヤ主義を所与として捉えるのみであり、その宗教的起源を問うてはいないということを問題視する。我々はこうしたナンシーの議論を辿ることで、ナンシーが反ユダヤ主義の起源を「キリスト教の自己憎悪」として問うことによってハイデガーの存在史的思索に対する批判を試みているのだということを明らかにする。

次に、我々は『私たちの中のユダヤ人を排除する』の検討を通じて、キリスト教の内に如何に反ユダヤ主義が孕まれているのか、

そしてそれが如何に西洋の歴史全体に取りついているのかという点に関するナンシーの議論を検討する。ナンシーは、ユダヤ教が天上の国と地上の国との分離を説くのに対して、キリスト教がそうした「王国の区別」を廃棄する性格を有すると指摘する。ユダヤ教の否定として開始されたキリスト教は、世界の彼岸を認めるユダヤ教に対して、自らの信仰がそうであるべき姿を認めつつも、それを自己憎悪的に否定しようとするのだ、ということがここで主張されている。ナンシーは、ギリシア、ヘブライ、ローマの思想史を独自に辿りつつ、ギリシア的な自律とユダヤ的な他律を総合しようとするキリスト教の内に閉鎖的な主体性という問題を看取する。自己の根源に対する憎悪として特徴づけられる反ユダヤ主義がこうした主体の自己閉鎖的な性格に由来するものであることを指摘しつつ、ナンシーは自律的なものと他律的なものを神のうちに同盟させることも、それを致死的に対決させることもならないと主張し、今日の我々がキリスト教的な主体と決別する必要性を説く。我々は同様の論点を『アドラシオン』(2010)などの他の著作の内にも探りつつナンシーの議論を追跡し、背景となる文献を適宜参照することで、こうした議論の内実を検討する。

そして、我々は再び『ハイデガーの凡庸さ』の議論へと戻り、ナンシーがハイデガーの存在史的思索のどのような点に反ユダヤ主義を招き寄せるような自己閉鎖的主体性を見て取っているのかを明らかにする。我々は『自由の経験』(1988)において展開された時間という観点によるハイデガー批判をも参照しつつ、ナンシーがハイデガーの存在史的思索の内に始元一終末構図による歴史的地平の全体化を見て取っており、そうした始元作用性 archéotropie 乃至は目的=終末作用性 téléotropie に則った存在 (Seyn) 主体の閉鎖的な全体としての歴史という思弁的前提を問題視しているのだということを明らかにする。

以上までの議論を基に、我々は、ナンシーが1945年以降のハイデガーの議論の内にこうした始元一終末構図とは異なった歴史把握の可能性を認めており、『自由の経験』においては「物の力としての自由」という身体論的モチーフから、『私たちの中のユダヤ人を排除する』においては「キリスト教の自己憎悪としての反ユダヤ主義」という宗教論的モチーフから、始元一終末構図の批判がなされているということを指摘し、時期を異にする両議論を今後より一層整合的に解釈して行くための手掛かりを確認する。また、「黒ノート」を巡ってこれまでになされた先行研究を参照しつつナンシーの議論が「黒ノート」解釈に寄与する可能性を示すほか、ナンシーと同様にハイデガーの思索をその宗教性という観点から批判的に検討した他の論考(M. ザラデル『思考されざる責務』、D. フランク『ハイデガーとキリスト教』など)に対するナンシーの議論の独自性に関して簡単な考察を行う。